

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 XI



平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 XI

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦
XI

平成十三年三月三十日 印刷

平成十三年三月三十日 発行

編集 東京都新宿区西新宿二丁目六番一号
発行 平和祈念事業特別基金
印刷 文唱堂印刷株式会社

まえがき

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲を銘記し、かつ、永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉の念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立されました。

当基金では、その業務の一環として、関係者の労苦に関する調査研究を実施しており、この「平和の礎——軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦——」はその成果を取りまとめたものです。

この業務の実施に当たり、当基金は、平成元年度から社団法人元軍人軍属短期在職者協力協会に、主として次の三つの観点から従軍体験者の手記の執筆あるいは聞き取り等により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託してきました。

- (一) 兵役と家族状況
- (二) 軍務・戦闘と意識
- (三) 復員後の生活と家族

同協会では、全国的に活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多くの体験記等を収集し整理の上、「恩給欠格者に係る労苦に関する調査研究報告書」として基金に報告がなされました。

本書は、体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録であります。報告された労苦記録の各編には、各地で軍務に服し、過酷な戦闘体験をはじめとして、特に短期の軍務服役であるための様々な労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれています。

今次大戦は、成年男子総数の四分の一、ほぼ二世帯に一人強が出征兵士として戦線に投入される等、人もモノも根こそぎ動員する総力戦となりました。戦後五十五年が経過し、戦後生まれが人口の三分の二を占め、戦争に関する意識の風化が進んでいるといわれる今日、軍人軍属短期在職者の労苦を徒労に終わらせないためにも、この労苦を子々孫々に語り継いでいくことが必要であり、そのためにも、この書は貴重なものと考えます。

本巻には七十六人の方々の労苦の記録が掲載されていますが、第一巻から数えると七五五編の体験記録が所収されたこととなります。

最後に、実際に執筆に関わられた多くの方々のご協力と調査研究に当たられた同協会関係者のご努力に感謝するとともに、本書が関係者のご労苦について国民の皆様の理解を深め、かつ、後世に伝えるための一助となれば幸いです。

平成十三年三月

平和祈念事業特別基金

理事長 上村知昭

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

XI

目次

まえがき

上村 知昭

第一部 勞苦体験記

〔大陸〕（北 支）

歩兵の小隊長、

中隊長として北支等に從軍

山崎 仁夫 1

〔大陸〕（中 支）

今日を想う

私の從軍記 入隊から中支戦線まで

石崎 皓三 11
中村 喜之助 18

〔大陸〕（南 支）

終戦直前の南支勤務

戦争の思い出

死線を越えて内地送還

南支派遣軍第十二師団

手銭 初栄 28
中野 泰男 35
芦田 吉雄 44

第一建築輸卒隊員

一 源潭墟にて

成守 宝 47

二 私の陣中日記 医務室勤務

三 南支戦線 死線を越えて

四 今だから言える話

平田 哲造 51

秀島 貴 53

平野 三吉 56

〔大陸〕（満 州）

戦歴なき軍隊は運隊であつた

日比 三千雄 58

〔南方〕（ビルマ）

ビルマ「龍」救援補充隊として

獣医としてビルマ諸作戦に参戦

松尾 喜次郎 67

河野 要 78

〔南方〕（ニューギニア）

東部ニューギニア 後方部隊の勞苦

浦沢 良平 84

〔南方〕（南洋諸島・他）

張鼓峯参戦、トラック諸島で終戦

赤羽 政喜 95

〔海 軍〕

一 海軍軍属の敗戦從軍記録

矢野 美三雄 101

〔航空〕

予科練の思い出

杉浦 文男 113

陸軍特別幹部候補生制度の発足と、

航空兵として参加した者の記録

青木 誠 119

〔内地・その他〕

労苦体験手記

米重 愿 124

船舶部隊の戦陣回想

権田 梅芳 132

戦争と食糧

松井 信一 137

第二部 聞き取り調査記録

〔大陸〕（北支）

駐蒙自動車隊勤務と教育

永瀬 金太郎 145

北支各地に転戦して

大和 正一 149

北支驚兵団 戦病を克服し

林 繁實 156

〔大陸〕（中支）

私の青春

池田 嘉高 160

強健体となって保護員から高射砲隊へ

山内 勝衛 165

師団通信小隊長の中国参戦記

金築 富雄 168

第一線の衛生兵

和田 富海男 173

昭和二十年徴集兵の中支での軍務

都竹 義之 181

支那大陸戦線で九死に一生を得る

植田 信夫 184

中国四省三八〇〇キロを歩き戦う

國立 逸雄 189

家族を残して満・支での戦務

笹沼 玉三郎 197

歩兵第一二〇連隊

大門 久太郎 202

中支戦線幾山越えて

〔大陸〕（南支）

鯨兵团兵器勤務隊 中南支の戦闘参加

中屋敷 博 208

駐蒙軍騎兵第四旅団

河南作戦、戦後の対共戦闘

山平 春重 213

最高の戦友愛

持田 武 217

豊橋工兵第三連隊の想い出

熊田 敏夫 221

広東戦線異常なし

加藤 薫 224

〔大陸〕（満州）

関東軍軍属回顧

奇なる哉、我が戦運 満州―内地

在外引揚、現地召集、

抑留・強制労働、そして帰還

二度と戻ることの出来ぬ思い出

南洋―満州―大連の重労働

満州事変から終戦処理まで

私の満州行脚と外蒙古抑留

私の軍隊体験記(満州)

北満国境警備と

初級士官教育の体験について

満州入営より六十年 公務に奉仕

ソ満国境と帝都防衛

敗戦を外地で味わった悲惨さ

大場 龍蔵 228

寺本 近造 231

赤羽 一成 237

小松 莊市 248

浮田 信茂 260

藤井 繁治 264

越智 壽 270

寒河江 達雄 276

下畑 春造 282

郡司 登久 287

惣田 甚郎 292

〔南方〕(フィリピン)

比島作戦従軍の思い出

戦車第二師団(撃兵団)

フィリピン戦線の苦しみ

藤田 利雄 298

小菅 正次郎 306

〔南方〕(ニューギニア)

「渾」作戦斯く戦えり

西武ニューギニア・ハルマヘラの苦闘

田中 英雄 310

飯塚 静男 315

〔南方〕(ビルマ)

ビルマ戦闘での負傷を克服、

恩給を返納

佐伯 勇 328

〔南方〕(仏印)

仏印歩兵第八十三連隊

仏印、マレー炎熱下

重労働・飢餓克服

邑本 衛 332

唐澤 甲子雄 337

〔南方〕(南スラバヤ)

兵隊と通訳生活六カ年

山田 千代治 347

〔南方〕(ニューブリテン)

ニューブリテン島の生き残り

父と慕う小森中佐を憶う

椿 省三 354

小林 仁平 357

〔南方〕（南洋諸島・他）

満州東寧から西カロリン群島

ヤップ島防衛戦まで

満州・トラック島の戦務

関東軍の精鋭、南方戦線へ

馬場 忠俊 365

荒明 文衛 373

村上 博 379

〔海軍〕

小スンダ孤島での海軍医療

私の海軍生活 戦艦「伊勢」と共に

一蓮托生 鉄の棺桶・潜水艦

ボルネオ島縦断戦記

軽巡「夕張」乗組みから猿島警備

嗚呼・悲愴なり「国川丸」の最後

元アメリカ駆逐艦第一〇二号

哨戒艇に救われる

巡洋艦「木曾」 アッツ・キスカ戦

安井 稔 385

池田 信雄 388

武部 敏克 394

田村 弘 399

磯山 喜恵 405

北村 重雄 410

村田 武一 419

掛下 清行 424

〔航空〕

海軍航空隊一筋五年半

いまだに続く戦友愛

生死一如 ― 特別攻撃隊戦記（三）―

第十三期予備学生

我が青春は海軍航空隊

〔その他〕

激動の我が青春

船舶工兵第三十連隊

〔特別寄稿〕

テニアン島 遺骨収集中

泉信潤老師殉難

近藤 正寛 430

長沼 武治 434

加美山 茂 447

森 桂吾 463

高瀬 充夫 471

星澤 實 475

大陸（北支）

歩兵の小隊長、

中隊長として北支等に従軍

―歩兵第三十三連隊、歩兵第七十七連隊―

三重県 山崎 仁 夫

軍隊履歴

昭和十（一九三五）年十二月一日

現役兵として歩兵第三十三連隊入隊

十二月十二日 満州派遣北満警備に従事

昭和十一年三月十日 歩兵科幹部候補生に採用

六月五日 甲種幹部候補生に区分

七月四日 内地原隊帰着

七月十日 昭和六年―九年事変における功

により金三十五円を賜る

十一月三十日 現役満期除隊

昭和十二年九月一日 教育召集のため歩兵第七十八連

隊に入隊

十月一日 将校勤務終了、召集解除

昭和十三年三月三十一日 任 陸軍歩兵少尉

六月二十八日 臨時召集のため歩兵第七十

七連隊に入隊

十月十九日 野戦隊補充のため屯地発、北

支山西省にて第一大隊第一中

隊第一小隊長を命ぜられ戦闘

力構成に参加従軍

昭和十四年十二月一日 任 歩兵中尉

昭和十五年一月六日 北支出発

一月八日 原隊帰着

二月十日 満浦鎮（平安北道江界郡）警備

隊長を命ぜられる

四月二十九日 支那事変における功により

功五級金鵄勲章並勲六等單

光旭日章及金二千六百円を

賜る

八月二十五日 召集解除

昭和二十年三月三日 臨時召集のため久居第三十八部

隊に入隊、同日第一四七警備大

隊第一中隊長を命ぜられる

三月十八日 朝鮮警備のため屯地出発、京

畿道水原邑に駐屯

十月九日 終戦のため仁川出港

十月十五日 佐世保着、召集解除

一 満州事変

昭和十年十二月一日、私は久居の歩兵第三十三連隊に初年兵として入隊した。当時連隊は、満州警備のた

め北滿に駐屯していて、連隊の本部はチハルの東大營にあった。私達は、新しい軍服や、名前もいちどきには覚えることの出来ないほどの数々の装具を支給されて、隊伍を組んで歩くことと、敬礼の仕方だけを教えてもらったという、はなはだ頼りない兵隊のままで満州へ渡ることになった。

神戸港から御用船で北朝鮮の雄基に上陸。零下三十度の雪の荒野だが、もうすっかりあきらめていて、どこへでも連れていけという感じ。しかも同じ境遇で、同じ気持ちの初年兵であるから、故国を出発した前後ほどの深刻感はない。

どこをどんなふうに通過したのか、また何日かかったのか今では全く記憶はないが、ようやく駐屯地のチハルに到着した。煉瓦建ての立派な二階建ての兵舎の前に整列して、連隊長の訓示がある。「よくやって来た。今後の活躍を期待しているぞ」というような話だったのだから、肩にくい込む重い背のうを幾度か上にずり上げながら、訓示の早く終わるのを待ちわびていたことぐらいしか記憶に残っていない。

軍隊経験のある人なら、誰でもご承知のことであるが、入営後一番鍛えられるのは、一期の検閲前の三カ月である。そして鍛えられるのは、野外で行われる訓練だけではない。内務実施と言って、兵室内での起居動作全体が訓練の対象となる。しかも営外居住者の将校達がいなくなった朝晩と夜間に集中して行われる。

この時間は、伍長や新米の軍曹が中隊の殿様で、下士官室に君臨しており、内務班の兵室は、柄の悪い二年兵の天下である。新兵にとって、一番待ち遠しい消灯ラッパが「兵隊さんは可哀想だなあー、また寝て泣くのかよー」と夜の兵営内に響き渡って、皆寝台にもぐり込み、班内が一斉に暗くなると、彼等悪魔たちが行動を開始する。

「第一内務班の初年兵、起床！」初年兵は、飛び起きて襦袢袴下の寝ていたままの姿で、各自の寝台の前で不動の姿勢をとる。「山崎二等兵、貴様は銃の手入れを行ったか」「やりました」「ここへ来い。引鉄の用心金の裏に埃がついている」「手入れしました」「文句はいらん」パン、パン。両ほほのビンタが始まる。

「軍靴の裏に土がついている」「たんつぼの掃除が不十分だ」「今日の行軍で落伍した奴がいる」悪魔たちの目から見れば初年兵をしぼる種はいくらでもある。「今年の初年兵は、気合が抜けているぞ」「初年兵全員二列に整列。前列回れ右」「対抗演習始め」。対抗演習というのは、向かいあった者同士が、相手のほほを交互に殴りあう懲罰動作である。営内での私的制裁は、正式には禁じられていたようだが、このようなことが毎晩繰り返されて、初年兵の動作もだんだんと機敏になる。

歩兵の初年兵教育は、戦闘のための基本動作である各個戦闘教練と、基本射撃、銃剣術で、その中でも初年兵が一番苦勞するのは銃剣術だ。基本動作は、正規の時間に教官が教えてくれるが、その後の練習は、朝夕、中隊宿舎前の広場で行われるいわゆる「寒稽古」が中心である。「初年兵、銃剣術に集合」と週番上等兵の声がかかると、初年兵は防具と木銃を持って舎前に整列、直ちに腕自慢の二年兵との稽古が始まる。キャリアが違い過ぎて、対等に仕合が出来るはずがな

い。足がもつれる。目に汗が入る。「しっかかりかかってこい」力いっぱい突いていくと、軽く外して、木銃で地面に押し倒される。まるで大人と幼稚園児との相撲のようだ。

当時私は体重が五〇キロくらいで、腕も細くぶざまな姿であったが、その骨のような細い上膊部をさんざんに突き上げられ、揚げ句の果ては、左手を全然曲げることが出来なくなった。

陸軍病院で診断を受けると「化骨」しているという。軍医殿は「なかなか治らないと思うが、湿布でもしておけ」という。中隊の衛生兵は「一生治らないぞ、兵役免除だなあ」と更に悲観的だ。万歳の声に送られて勇躍征途にのぼったのに、銃剣術で二年兵に突かれて廃兵になったといつて郷里に帰ることも出来ない。腕の曲がったままで、演習も一切休まず頑張り通すことにした。

私達初年兵の教官は、日比野少尉と言って、陸軍士官学校を卒業したばかりの紅顔可憐の美青年であった。初年兵の私達は、内務班では二年兵に気を使って

ばかりいて緊張の連続であったが、この日比野少尉の初年兵教育は、一番楽しい時間であった。私達第六中隊の第一内務班の初年兵は大部分分校出で、幹部候補生の受験資格のある者が多かったので、彼は士官学校で自分が受けた教育と同じ要領で私達の人格を尊重しながら教育を実施していて、厳格ではあるが愛情のこもった訓練であった。

三カ月経つと、北満の凍りつくような風もだいぶん和らいだきた。地面はまだ深くまで凍ってはいるが、営外の柳のこずえをゆさぶる風も、あの肌を刺すような厳しさはない。討伐に出動していた二年兵も帰隊して営内も平常に戻り、一期の検閲が始まった。

今日は最終日で部隊戦闘教練だ。三カ月間の成果を連隊長にお見せするのである。見渡す限りの平原には所々に薄雪が白く残っていて、地面はまだコチコチの凍土である。遙か遠方に低い丘陵地が見えて、それが敵のトーチカ陣地であり、今日の私達の攻撃目標である。日比野少尉の「攻撃前進！」の透き通った号令が広野にこだまする。私達は立ち上がって走ることが許

されない。全員匍匐前進だ。地面に腹ばいになって、銃を水平に前面で支えたまま前方にじり寄る、いわゆる尺取虫式の匍匐前進だ。

一〇〇メートル、二〇〇メートル、銃を支えて前後に動かしている両手が疲れてくる。腹の皮が痛くなる。一休みしたいが隣の二年兵より遅れるので一息つくわけにもいかない。五〇〇メートル、七〇〇メートル、凍った土の上であるが、寒さや冷たさなんかは一切感じない。汗が流れて目に入る。手でこすると顔がじりじりする。

一〇〇メートル、一二〇〇メートル、もう自分の身体か、誰の身体か分からなくなって気が遠くなってきた時、日比野少尉の突撃の号令だ。「突撃に進め」「突っ込め」。私達は一斉に立ち上がって煙幕の中を敵のトーチカに突入した。「状況、終わり」。トーチカの攻撃の演習は、これで終了した。連隊長の講評は「諸子の攻撃前進は、よく忍苦に耐え、かつ勇猛果敢、立派であった。これでソ連のトーチカ陣地に対する攻撃にも自信を得たものと思う」と、日比野少尉以下一

同、連隊長の激賞にあずかったのである。

しかし、私はそれ以上に嬉しいことに気がついた。それは「化骨」していたはずの私の腕が、匍匐前進の間に、いつの間にか軟らかくなって完全に治っていたのだ。「教官殿、自分の腕が治りました。完全に動きます。見てください」「山崎二等兵、よかったなあ」日比野少尉は、私の左腕をカーキ色の将校用の手袋のまま、優しくさすって、共に心から喜んでくれたのであった。

赤い夕日が広野の果てに静かに沈みかけたころ、私達は元気に軍歌を歌いながらトーチカ陣地を後にして兵舎に向かった。(教官の日比野少尉は、支那事変の当初、中隊長として奮戦し、戦死された)

二 支那事変

昭和十二年七月、日支事変が勃発すると同時に平壤に駐屯していた歩兵第七十七連隊は急ぎよ北支に出動して、南范、郎坊の緒戦から連戦連勝、一挙に石家荘まで進出した。山西省の入り口の難関である娘子関では、戦死五〇〇人という大損害を出したが、昭和十三

年の正月は山西省の首都太原の周辺で過ごし、続いて臨汾、聞喜、運城と同蒲線に沿って山西省を南下、激戦に次ぐ激戦を重ねて、八月の末、ようやく山西省西南端の要衝風陵渡の高地を占領した。私の属する第一大隊は、高地占領後、この敵前の第一線に残って、それから約十カ月にわたる黄河を挟んだ長い対陣生活に入った。

私が補充で第一線に到着したのは昭和十三年十一月初めで、我が第一中隊は風陵高地の東方四〇〇メートルにある西王村という黄河北岸の寒村の警備に就いていた。

黄河の対岸の潼関からは、夜となく昼となく大きな大砲で砲撃してくるので、風陵高地の大隊本部と第二中隊は穴藏生活をしていた。我が中隊は現地住民の家を借用して、分隊ごとに宿舍に入っていた。部落の入り口には地下陣地を備えた下士哨があつて、第一小隊は、西門と北門に三個所の下士哨を出していた。私達は翌年三月に東王村に移駐するまで、この地に住みつくことになった。

昭和十三年十一月二十七日午前二時二十分、第二下士哨の前面に約一個小隊の敵が夜襲して来た。これは、私が戦地へ来て初めての敵との遭遇で、しかも到着してからまだ二十日足らずであつたので覚悟はしていたが度肝を抜かれた。やっと寝付いた真夜中、枕元での敵の銃声で飛び起きたが、脚がガタガタして靴が履けない。やつのことで革脚絆を着け軍刀を引っさげて外に出ると、いつの間になつてきたのか、小隊の兵隊全員が武装して舍前に整列し小隊長の私の指示を待っている。

当番の伊藤上等兵を頼りに暗闇の中を行ったり来たりしていると、中隊長の鬼木大尉が傍らにやって来て、擲弾筒に射撃の方向と距離を示し榴弾の射撃を命じた。実に慣れたものである。前方の隙地の方で山砲が破裂したような音がして、急に敵の射撃が止み静かになる。私も気を取り直して第二下士哨の方に向かった。

このような夜襲は、これ以後何度もあつて新米の小隊長もだんだんと慣れてきて一人前なるのだが、この

夜の最初の敵の夜襲には全く度肝を抜かれて、お恥ずかしいものであった。

三 大東亜戦争

敗戦の時、私は京城（ソウル市）の郊外にある水原高等農林学校の中に第一四七警備大隊第一中隊の本部を置いていた。八月十五日、天皇陛下の終戦の放送を拝聴した私は中隊の全員を本部前の広場に集め、次のような訓示を行った。「ただ今、恐れ多くも、大元帥陛下の御言葉をラジオで拝聴した。我々の日夜の奮闘にもかかわらず、わが国は本日、米英に対して無条件降伏を行った。間もなく、米国やソ連の兵が当地にも進入してくるだろう。また祖国日本の本土も彼等の蹂躪に伏すことと思う。各地でどんな悲劇が展開されるかもしれない。しかし、我々最後まで生き残った者は、この大きな試練に耐えなければならない。昔から『国破れて山河あり』という。我々の郷里の山河は、どんなに焼けただれ荒れ果てているかもしれないが残っているはずだ。我々はこの残された山河と留守を守り抜いた家族を守らなければならないのだ。占領下

の屈辱ははかり知れないと思うが、どんな屈辱であってもこれを耐え忍び、十年でも、二十年でも辛抱しうではないか。そして、ただ今のこの無念を我々の子供や、孫達に伝えようではないか。どうか自棄を起さず、体に気をつけて、全員うち揃って郷里に帰り着くまで自重してもらいたい」と。

わが中隊の将兵は三重県における最後の召集であったため、適齢期の青年はすでに出征していておらず、小学校の校長先生や教頭等の短期現役兵出身の相当地位のある年配者が多かったが、方々ですすり泣きが聞こえて、互いに祖国の再起を誓いあったのであった。

隣接して航空隊があった。水原特攻基地である。この将校から「わが方には、飛行機も爆弾も十分ある。このまま引つ込むわけにはまいらない。後に続く者を信じて戦死した戦友や部下に申し訳がないから、米軍が接近してきたら敵艦に突つ込むことにした。警備隊は飛行場の確保をたのむ」との連絡がある。翌日には「将校全員飛行場で腹を切ることにした。一緒にどうか」という誘いである。そもそも我々の第一四七